

事務局 〒980-0014 仙台市青葉区本町1丁目13-32 オールラベル2F TEL:022-722-3380 FAX:022-722-3381 E-mail: miyagi.kaidou@gmail.com

みやぎ街道交流会

題字:高倉 淳初代会長 揮毫

みやぎ
街道
交流会
ニュース
第25号

2013.10.20 発行



巻頭特集

夏の地名講座 開催報告

だざいゆきこ
太宰幸子 太平洋沿岸地域を歩く

宮城県沿岸地域の歴史～震災～現在～未来。
地名研究の太宰幸子氏が調査研究を通じて感じ
た未来へ語り伝えるべきこととは・・・



表紙画像：宮城県地名研究会提供（宮城県沿岸地域で出逢った人や風景）

その他の記事

- イベント報告
みやぎ街道交流会 平成25年度ミニ講座「御普請方留にみる土木技術心得」
- 街道ノート
H25 定期総会記念講演会「川の道の歴史を探る」講演記録概要
- イベントのご案内
とうほく街道会議 第9回交流会 一関大会／第9回羽州街道交流会 黒石大会
- 事務局からのお知らせ

巻頭特集

太宰幸子 太平洋沿岸地域を歩く

～大震災の前・直後、そして今・明日～

“夏の地名講座”を宮城県地名研究会・みやぎ街道交流会協働で、平成25年8月18日(日)10時～12時、エル・ソーラ仙台において開催しました。

今回の講座は、講師の太宰幸子さん(宮城県地名研究会会長・みやぎ街道交流会顧問)のこれまでの調査結果を踏まえ、地域の歴史や被災前の姿、被災直後及び復興への歩みを始めた現在の状況と、そこに住む人々との会話を通じ、明日に向かって進む人々の力強さを紹介しながら、数百年・一千年後に残し・伝えるべきものは何かを考える切っ掛けとなることを目的としています。



◆開会のあいさつ/みやぎ街道交流会会長 白鳥良一氏

「震災に関連して発刊された太宰さんの著書では、地名に関するだけでなく、地域の歴史などこれまでの豊富な調査・研究の成果を踏まえるとともに、太宰さんならではの優しく人間味のある、地域の人々と慎重にコンタクトをとりながらの会話の一部の中から地名をひも解いていく、大変に素晴らしい仕事をしていると思う。いろいろ調査をしていて、著書に書けなかった内容も含めて、ご紹介頂けるもの」と期待が述べられました。



◆この講演に込められた太宰さんの想い

「始めは、そこに足を踏み入れるだけで申し訳ない気持ちが出て、何ヶ月も聞き取りのレコーダーを持たないで歩いた。余りにもショッキングな被災地の様子に私の方も被災した気持ちで帰って来て、パソコンに写真データを取り込むのが精一杯で、何ヶ月も原稿に起こすことが出来なかった。

でも、やっぱり記録を取り、本の原稿にすることにより、皆さんの気持ちを分かるように書けないかと思い、3ヶ月を過ぎてからはレコーダーに記録してある。その膨大なデータの一部を配布資料の中に参考資料として、各地での会話をテープ起こしたものを添付してあるので、是非読んでほしい。また、聞き取りにあたって、あまり心の中に入り込まない様にと、上面だけで聞かない様にとずっと気をつけてきたところを感じ取っていただければ良い。」と想いを語られました。



◆**参加者アンケート** 講座の内容について「大変良かった・良かった」が95%以上となっており、自由記述の内容からも大変に好評でした。(自由記述の抜粋は次のとおりです。)

[Q: 講座の内容について] あまりにも知らな過ぎることが多いので、今回の講座に参加することにより、大いにやる気がでてきた。／感動しました。地域の人たちとの話と会話から感じられる先生の息づかい、優しさです。／最初、何ヶ月もテープを持って被災地に入ることが出来なかったというお話。片浜で出会った畑仕事をしている方のお話。体験談は貴重ですね。

[Q: 地名研究について] 地名には古くからの自然力の意味が含まれており、非常に意義のある研究だと思います。現在・今後、起こり得るであろう自然災害を最小限に食い止める為にも、昔からの地名の意味を理解する必要があると思います。／古い地名はおそらく縄文時代から続いてきているのではないかと思います。このような地名は研究・整理してきちんと残して行かなければならないと思います。日本列島に住む人々の歴史ですので…。／都市開発が進む中、今後の防災のためにも自然地形や地学を意識して学習していかなければならず、地名研究は重要だと思う。

◆**最後に** 今回狙いとした太平洋沿岸地域の復興支援のため、地域に住み人々にも焦点を当てた内容は、これまでの地名研究にはない、今後の新たな方向性が示されたものと思っています。

※配付資料はみやぎ街道交流会ホームページに掲載していますので参照ください。 [みやぎ街道](#) [検索](#)

平成25年度ミニ講座「御普請方留にみる土木技術者の心得」 講師 三浦 良信(みやぎ街道交流会顧問)

みやぎ街道交流会のミニ講座が平成25年4月13日(土)みやぎNPOプラザにて開催されました。江戸時代の土木技術を後世参考の便に備えるために、明治の先学が丹精を込めて書写した『御普請方留』を、当交流会三浦良信顧問が土木技術者として分かり易く『御普請方留にみる土木技術者の心得』として紹介して下さいました。また『御普請方留』は高倉初代会長が活字にして発行(翻刻)されています。当日は、普段とは異なり土木技術者の方々も多く見え、聞き入っていました。三浦顧問の講演の後、同じく当交流会の顧問で東北大学の教授をされている平川先生の感想を交えたお話もあり、土木技術ばかりでは無く当時の生活を伝える貴重な資料でもあることを改めて感じました。恒例の講演後の街道談義では三浦顧問を囲みながら、おいしいお酒と交流を楽しみました。

◆**三浦顧問の講演概要** 高倉初代会長から、三浦顧問が土木技術者として『御普請方留』を翻訳してくださいと以前に頼まれており、今回は、勉強会として進められました。『御普請方留』は戊辰戦争の数十年前に仙台藩の土木屋が後輩に技術を伝えるために書き留められた技術書であり、土木・建築・積算基準まで書かれています。今回は高倉先生の活字本を読み下しながら、以下の4つについて分かり易く三浦顧問に解説して頂きました。①治水工事(護岸・堤防など)②トンネル工事(掘削方法など)③釘(釘の発注方法・購入方法など・・・不良品が多く出回ったため)④役人の心得(点検・見回り・維持管理・補修・調査・住民対応など)



三浦顧問

- ◆**平川先生の感想** 講演後に平川顧問(東北大学教授)に総括して頂きましたので、要約します。
- ・『御普請方留』は理解が難しく料理法を考えていたが、今回、一字一句追いながら三浦顧問に技術的解説を加えて頂き、理解できたところも多かった。
 - ・川村孫兵衛の名前がいくつか出ていたが、技術畑では指導が評価されていることが良く理解できた。
 - ・土木技術を適用した治水・新田開発が盛んになる等、歴史的な前提を示すような事も書かれている。
 - ・仙台藩の寛政の改革の内容は、海産物の流通などは多少分かっていたが、資料があまり残されておらず、良く分かっていない。『御普請方留』に「普請、村請にあいなり」と書かれており、公儀普請(公負担)から村普請になった変化がこういうところにもあることが分かり、良い発見であった。
 - ・江戸時代は、民の声がお上に届かないというイメージが強いが、実は造られたイメージで、民の声を非常に大事にされていて無視して政治は出来ないと、御普請方留からも読みとる事が出来る根拠になると思う。江戸時代の身分制のきつい社会のイメージは、明治時代に作られた偏見であると思ったほうが良いと思う。



講演会の様子



街道談義の様子

みやぎ街道交流会 定期総会記念講演会

川の道の歴史を探る ー北上川下流域を中心にー

齋藤 善之 氏(東北学院大学教授・みやぎ街道交流会顧問)

6月8日にみやぎNPOプラザ第1会議室において、みやぎ街道交流会定期総会が行われ、総会終了後に、東北学院大学経営学部教授の齋藤先生をお招きして、記念講演会を開催しました。

北前船や太平洋側の奥筋廻船などがありますが、今回は宮城の北上川下流域に焦点を絞ってご講演を頂きました。その配付資料、スライド映像及び録音から事務局の責において、講演記録として概要を報告します。

I 船の世界

11 船(ひらたぶね)とは



近世から近代にかけて北上川の物資輸送には、いろいろな種類の船があるが、主役は船である。写真-1は、江戸時代の船で北上市立博物館展示の復元模型。実際の帆は縦に切れており、その枚数で帆大きさ(例えば6反帆)を表した。写真-2は、模型の根拠となった「御船小操船定法書(文化13年)」を基に作図したものである。

水深が浅い河川運河を航行するため、船底が平らであり、かつ幅広く、搭載量が多くなるよう工夫された独特の船形から、ひらた船と呼び、作った漢字で“ふなへん”に“おび”書く。

戦前期に北上川下流域を行き交った船は20艘とも云われ、写真-3は、福地の齋藤家所有「第七齋宝丸」で、北上運河の新橋付近で撮影されたもので、前は曳船。昭和6年頃、福地の製材所付近で建造し、全長(敷)=63尺(約19m) 幅=15尺(約4.5m) 深さ=4尺(約1.2m)あり、当地では最大級で、これより大きいと石井閘門を通過できない。

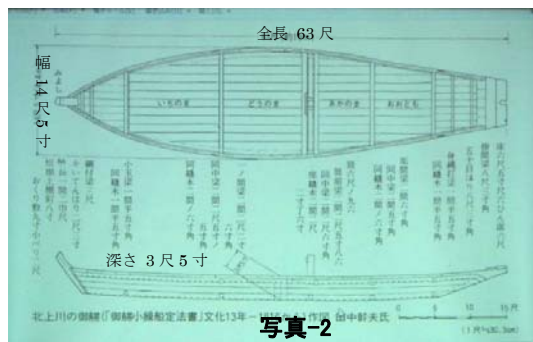


写真-2

2 船の関係者の聞き取り

福地2名、月浜1名及び追波浜の3人姉妹。

(東北学院大学齋藤善之ゼミ編『石巻の商いと暮らしの記憶』2000年・同『追波地域の商いと暮らしの記憶』2001年)

3 運航

動力をもたず自走できないので人力+自然の力のみで運航した。曳船出現した大正期からは、曳航料を払って他家の曳船や巡航船などに曳航してもらった。

風力：季節(南北)の風、海・山風の変化、地形による独特の風を知り尽くし、これを利用した。

潮汐力：石巻・北上川と東名・塩竈の潮時の微妙な時間差を予期・活用した。また、干潮、特に大潮の時は、船底がつかえてしまう場所と時間を予知して運航した。そのため常に潮汐表を携えていた。

人力：最後は竹や丸木の棹を水底に突きあてて船を動かした。川岸の状況によっては、乗組員が川岸に上がり船を曳くこともあり、引綱は船の帆柱の頂上に繋ぐ。船が岸に近づかないので、岸辺の障害物を避けられる。また、水量が少なく浅瀬が多い難所の辻堂あたりでは、集落の人たちに若干の手間賃を払い船曳きの加勢をしてもらった。

曳船による曳航：大正期になると曳船による曳航が出てきた。写真-3の曳船は袋谷地(石巻)の造船所で建造。動力は20馬力の焼玉エンジン(単気筒ディーゼル)。曳船に曳いてもらう場合、船側は追突を避けたため綱を30~40mくらい延ばして繋いだ。数艘を数珠繋ぎにしたこともしばしばあった。ほかに巡航船の曳航は会社から禁止されていたが船長と船員等のいわゆる「ホマチ」(帆待=非公認の役得)として曳航してもらった。

4 船の積荷

江戸時代まで遡ると米を運んでいたことは当然だが、資料が十分でない。聞き取りをした昭和の頃、米は鉄道など別の手段で運ばれ、時間がかかるが、かさばって運賃の安いものが主となっていた。

材木：追波川沿岸の山から切り出して、石巻や塩竈の材木屋に運んだ。

薪炭：薪の「束木」とか「棚木」は、ナラの木などを割って2尺5寸から3尺くらいに束ねたもの。

その他：宮城電鉄の線路用の採石用、海産物、帰り荷として塩竈石(取れなくなると野蒜石)。



写真-3

5 艀船の荷役

積荷は、上げ潮時の方が楽で潮時をみて一気にやった。「潮時普請（しおどきぶしん）」といい、手間賃もアップした。

6 連絡手段

運航途中の連絡手段はほとんどない。到着した先の材木店などの電話や電報も使った。また巡航船の顔見知りの乗組員などに「ことわり」（言付け）を託すこともあった。

7 艀船の航路

艀船は河川専用船で、航路は北上川と運河、そして内海である松島湾に限定され、最大範囲は、北上町方面では追波浜・月浜あたりまで、石巻では住吉・湊・中瀬あたりまで、塩竈は北浜・中之島・大代あたりまでである。

石巻と釜谷あたりを1ヶ月で10回くらい往復。順調だと石巻と追波川河口を往復3日が最短で、福地あたりから石巻まで、曳船で曳くと潮や風の良い時で3時間くらいという。通常、夜間航行は危険で避けていたが、潮時のよい時などは運河や風向きがよければ松島湾も夜に走った。また、艀船は積荷の売買もしたから多額の金銭を携行しており、防犯上の用心も欠かせなかった。

8 難所と事故

難所：辻堂周辺は、川幅が広いわりに水深が浅い。特に運河は、全般に水深が浅く、干潮時などには船底がつかえて進まなくなる。逆に満潮時には積荷が橋桁に引っかかって進めないこともある。また、運河に出入する地点は、川の流れや海からの波を計算にいけないと上手くいかない。また鉄橋などの橋脚や松島湾内の海苔や牡蠣の棚にぶつけないよう注意を払った。

浸水：北上運河から鳴瀬川に出る所で杭と石で造った沈枕に曳船を乗りあげ、船が水浸しになることもあったという。

9 艀船の建造

石井閘門の北上川側に造船所があり、そこで艀船を建造していた。袋谷地にも船大工あり。船大工が現地に出張して適当な場所をみつろくって建造することもある。建造費は船1艘あたり家2軒分らしい金額。

10 船内生活

この時期には兄弟・夫婦・親子の家族や親族で乗り組むケースが多かった。夫婦の場合には、子供は乳児期までは船内で養育し、学齢期になると陸の親戚などに預けた。

艀船の前部にはカムロ（船室、家室？）と称する船員の居住施設があり、ここに寝泊まりする。カムロは、江戸期には見えない。明治期は船尾にあり、大正以降は船先にあった。岩手県方面から来る艀船は、長期の航海のため、風呂なども備えほとんど家のようになっていた。常に行く停泊地では、近隣に馴染みとなった宿や農家などに休泊した。石巻の住吉あたりは艀船が集まり、岩手県の方から来た船とも一緒になるため、よく会って話したばかりでなく、船の風呂を貰ったりもしたという。

楽しみとしては、石巻で映画、塩竈では寿司や蕎麦を食べに行くこと、新橋あたりでは雑貨屋で飴を買う楽しみもあった。

11 艀船の信仰

船内に神棚を造り付け、塩釜神社、福地の賀茂神社、釣石神社、大杉神社など地元や出先の神社のお札を祀った。船乗りの禁忌は、お産に際して夫の船方は仕事を休む、囲炉でタバコを吸う、風を呼ぶから口笛を吹いてはいけない。

12 アカとり(排水作業)

船底に溜まった漏水をアカ（アカ水）という。船が老朽化し船体が緩むと、船底に溜まるアカは深刻化する。これを常時排出しなければならぬ。艀船の場合、積荷を最大限かつ迅速に積み込むために船体上部の大部分が開口部になっていたため雨水や雪溶け水の滲入は避けられない。アカ汲みは艀船の船員の日々不可欠の作業で、大変だった。アカ汲みは、木製のアカ取りか手動のポンプ「スッポン」が使われた。

アカ汲みのほかにも、横波の時は、護岸石に押し付けられ船体に穴が空くため、一晩中、竿で回しながら船に石が当たらないように押しやる艀船特有の苦労があった。

13 艀船の終焉

近世以来、北上川の舟運の主役であった艀船は、第二次世界大戦後の昭和20年代末から30年代前半にオート三輪など貨物自動車が登場して、当時の主要な積荷の材木や薪炭を山から直送出来るようになり、終焉を迎えた。



写真-4

北上川最後の艀船（昭和57年11月）
登米郡中田町錦桜橋付近
※前部（写真左）は居住施設のカムロ



写真-5

石巻・湊村（明治21年）

参考写真-1(登米丸)



II 巡航船の世界

1 追波川の巡航船

明治期から戦後にかけて、追波川河口地域と石巻の間を結んだ定期船があった。旅客と貨物を運ぶ巡航船のうち最末期は、石巻丸・大和丸・亀岡丸の3艘。石巻丸は平底型で外洋には出られないが、水深の浅い所でも比較的容易に通過できた。大和丸と亀岡丸は川口から海に出られたが、喫水が深く水深の浅い所では難航することがあった。昭和前期にはバスもあったが、石巻から雄勝までのみで、十三浜（旧北上町）や十五浜（旧雄勝町）の人々にとっては、交通手段としての巡航船の役割はきわめて大きかった。

2 聞き取り

大正13年に福地生まれ（矢本町矢本在住）、昭和6年8月からわずか2ヶ月間、巡航船亀岡丸の船員として働いた経験を持つ。（東北学院大学斎藤善之ゼミ編『石巻の商いと暮らしの記憶』2002年刊。）

3 乗客と積荷

亀岡丸は10から20tくらいで、旅客定員は30から40人くらい（船室に入れたのはせいぜい20、30人で、あとはデッキに乗った）。貨物室には米や重量のある荷物などを入れ、入りきらない荷物が常に甲板上にあふれていた。

乗客には何となく地域ごとに船の乗り分けがあった。石巻丸は川船なので乗客は「陸の人」。亀岡丸と大和丸は海に出たので「浜の人」が多かった。

積荷は、月浜から先の浜々には車が通れず、そこで必要とされる物資はすべて巡航船で運ばれていた。穀倉地帯「大谷地耕土」の米などは「川の上」の船場で積み込んだ。浜方からは、相川、大室、白浜あたりで海産物を積み、石巻まで運んだ。艀船が積んだ材木、薪炭、石材などは巡航船に積むことはなかった。

5 航路と運航ダイヤ

航路は石巻から追波川を通り十三浜・十五浜に至る。石巻丸・大和丸・亀岡丸とも石巻から北上町月浜までは共通で、そこで折り返した石巻丸に対し、大和丸と亀岡丸はさらに追波川河口から海に出た。大和丸は大室浜から湾を横断して十五浜の名振浜・舟越浜に至りそこで折り返した。亀岡丸は十三浜の大指まで至りそこで折り返した。石巻から福地までが約20km、月浜までは約30km。船の速度はせいぜい5、6ノット。

各船とも運航間隔は1日1往復。ほかに交通手段のない十三浜や十五浜の人々は、夜中の2時・3時に起きて始発点の相川や舟越、または月浜まで提灯をさげて歩いてきた。多くは石巻方面への商用・買い物・通院などの所用。

各船は月浜を朝の4時半から5時半頃、ほぼ30分毎の間隔で出航した。福地からは閘門を通り運河に入る。辻堂から北上川（旧北上川）に入り、8時から8時半頃には石巻の内海橋と住吉公園の間の船着場に到着した。帰りは、午後零時から大和丸、亀岡丸、石巻丸と30分毎に石巻を出航していった。

6 船場

途中で寄る船場は3艘の船ごとに違っていた。最も寄る船場が多かったのは石巻丸で、石巻、梨の木、船渡、川の上、福地、横川、名倉（倉岡）、谷内、大須、釜谷、釜谷崎、追波、月浜（終点）。大和丸と亀岡丸は、石巻を出ると「川の上」まで直行し、「福地」、「釜谷」、「月浜」と同じで、その後、亀岡丸は「白浜」、「大室」、「大指」まで行き戻って「相川」で終点。大和丸は、「大室」から追波湾を横断して「名振」か「舟越」で終点。

船場といっても、施設らしいものは何もなく、船が着くとアユミという板を渡すだけ。「川の上」の船場だけは、造り出しの屋根があり乗客や荷物が濡れないようになっていた。海の港のうち「大室」・「白浜」・「船越」は船が着く棧橋があった。「名振」は棧橋がなく、ハシケ船、伝馬船という小船が陸地とを結んでいた。

7 難所と事故

難所は、艀船同様、水深の浅い地点。最大の難所は追波川の河口で、砂州が形成され、干潮時には船底を擦るほどであった。追波川の河口を出るのは比較的安心であったが、河口から入る時は危険性があり、北上川の大きな自然を相手に、逞しさと巧みな知恵でこれを乗り越えていったのである。



図-1 北上川下流域全体図

1 北上運河の研究史

日本の三大港湾の技術史的な意義、なぜ失敗したのかなど技術史的観点・土木工学的な観点からの研究が厚い蓄積があるが、流通経済史からの研究はあまりない。

港湾は土木技術だけでできるわけではなく、港湾が成立するかどうかは、その港がおかれた経済的諸条件にも大きく左右される。後背地との経済・流通関係の成熟、地域の経済的力量など野蒜築港についてはそのような観点からの検討が少ない。野蒜築港が失敗してからは、もとの荒野に戻ったというイメージで語られるが、野蒜築港は夢にして潰えた計画だったのか？



2 「石井・野蒜・閘門通船調」(宮城県公文書館蔵)について

石井閘門と野蒜(船溜) 閘門の通船記録として、明治21年5月1日から明治22年3月31日まで、「出船の部」と「入船の部」の区分で1ヶ月単位に交互、1件ごとに通船日/船種/穀類・材石・魚類・雑貨/積石数/発船地名を記録している。「宮城縣」の罫紙が用いられ、現地の「閘門開閉人」が記帳したものである。

3 北上運河を行き交った船(明治21年5月~12月)

「船溜閘門」における出入船数は表-1のとおりである。

| No | 船種 | 艘数 | 比率 | 積石実績 | 7月中の荷別艘数 | コメント等 |
|----|------|-------|------|-------|-------------------------------------|---|
| ① | 漁船 | 3,349 | 41% | ~20石 | 魚40、薪木11、米7、肥料5、雑品2、塩1、味噌1、焚炭1 | 半数近くを占める漁船、浮漁船。小型船。魚のほか雑多なものを積み込む。 |
| ② | 浮漁船 | 1,252 | 15% | ~30石 | 雑品2、白米1、角又1、砂糖1 | |
| ③ | 小蒸気船 | 1,001 | 12% | | | 会社所有と個人所有の2タイプ。岩手丸[狐禅寺~塩竈]17t 北上回漕会社 廣通丸[狐禅寺~塩竈]18t 同 北上丸[狐禅寺~塩竈]20t 同 一龍丸[石巻~塩竈] 2t 船主 木村利介 天竜丸[石巻~塩竈]12t 船主 木村利介 六龍丸[石巻~塩竈]17t 船主 志摩萬次郎 |
| ④ | 高瀬船 | 903 | 11% | ~150石 | 米4、酒樽1、味噌1、薪木1、石1 | この2つのタイプが船数では中級。うち高瀬船は中型船。小廻船は小型船。 |
| ⑤ | 小廻船 | 848 | 10% | ~4石 | 材木1、薪木1、瀬戸1 | |
| ⑥ | 平田船 | 252 | 3% | ~140石 | 米9、薪木9、材木6、石4、雑品2、塩2、魚2、大豆1、竹1、石油1 | このタイプは数的には少数。いずれも中型船。 |
| ⑦ | 伝馬船 | 219 | 3% | ~100石 | 米3、敷石3、石2、大豆1、雑品1 | |
| ⑧ | 茶船 | 212 | 3% | ~60石 | 雑品12、砂糖5、魚4、板3、味噌2、米2、肥料1、塩1、鉄1、敷石1 | 茶船は人の輸送もした万能小型船。 |
| ⑨ | その他 | | 1%未満 | | | 早波船、救助船、日本形船、西洋形船、遊船、かつこ船、土砂船 |
| 総数 | | 8,154 | 100% | | | |

*近世の高瀬船から近代の平田船への移行の過渡期を示す。

*月ごとの偏差として、最高は10月の1,179艘 最低は6月の697艘 月平均1,019艘 日平均40艘ほど。

4 北上運河を運ばれたモノ(明治21年5月~12月)

表-1の船で運ばれたモノを表-2に示す。

| No | 分類 | 内容 | コメント等 |
|----|------|--|--|
| ① | 食料 | 米6,246石、小麦3,750石、大豆3,164石、酒242石、五十集5,023駄、砂糖1,623駄、芋280駄、大根273駄、塩40,982俵、味噌2,400巻目 | 米、五十集、塩に加えて多様な基礎食材が運ばれている。 |
| ② | 住関係 | 木材19,156石、石4,162石、土管2,692石、瓦4,130駄、竹柄1,841駄、粗朶11,895束、畳表202畳 | 木材、石、瓦、竹など住宅関連資材の輸送が活発に行われている。 |
| ③ | 雑貨 | 瀬戸(物)395駄、ボロ屑303駄、籠261駄、縄104駄、空樽624個、俵端5,430枚 | 相当量のボロ屑の輸送のほか、空樽などリサイクル関連が目立つ。 |
| ④ | 衣料 | 細布289駄、木綿142駄、足駄歯木127駄、繭1,728石 | |
| ⑤ | 肥料 | 魚粕1,565俵、糠575俵、人糞416駄、灰402駄 | 肥料としては、魚の粕と人糞に加えて糠と灰の輸送が目立つ。 |
| ⑥ | 生産関係 | レール10,185石、硫黄2,281駄 | 近代輸送の花形である鉄道建設資材の輸送は、意外にも水上輸送によって支えられていた。 |
| ⑦ | 燃料 | 薪木14,546駄、柴2,529駄、杉枝2,190駄、石油1,046駄、炭9,131俵 | 都市の燃料(エネルギー)需要をみたす薪や炭のほか、新燃料である石油も水上輸送によってたらされていた。 |
| ⑧ | その他 | | |

5 まとめ

野蒜築港事業によって開削された北上運河であるが、明治21年段階では、当地域の物資輸送にきわめて大きな役割を果たしており、塩竈(東北本線の終点)と石巻を繋ぎ、鉄道と連結することで野蒜港に替わる新たな交通網として機能していたことも判明した。野蒜築港事業にともなう運河開削がもたらした経済史的意義については、再評価されるべきである。

この秋の街道関連イベントをご案内します。ぜひお出かけください。
また、興味のある方はお気軽にお問い合わせください。

街道イベントのご案内

平成25年11月1日(金)～2日(土)

とうほく街道会議 第9回交流会
岩手県 一関大会 『骨寺村から平泉・東北を考える』

平泉中尊寺経蔵別当の所領であった「骨寺村荘園」をテーマとして、中尊寺に伝存する古文書や2枚の「陸奥国骨寺村絵図」など、現代に中世の東北の原風景を残している村の姿を通じ、その調査・保存・活用における現状や課題等について学び、東北各地のまちづくり・地域づくりの一助とすることを目的に開催されます。

メイン会場: いちのせき健康の森

- 【1日目】 基調講演「骨寺村と平泉」 講師: 入間田 宣夫 氏/東北大学名誉教授
分科会「骨寺村の保存と活用について/ハピ初デイクッション」
「芭蕉の道(奥の細道)を通じた交流連携/車座座談会」
その他「街道パネル展(常設)」「街道談義(17時半～19時半)」
- 【2日目】 探訪会「Aコース:骨寺村をめぐる」「Bコース:芭蕉の道を辿る」



お申し込み先: 一関大会実行委員会事務局 まで

TEL 0191-48-5888

FAX 0191-48-5889

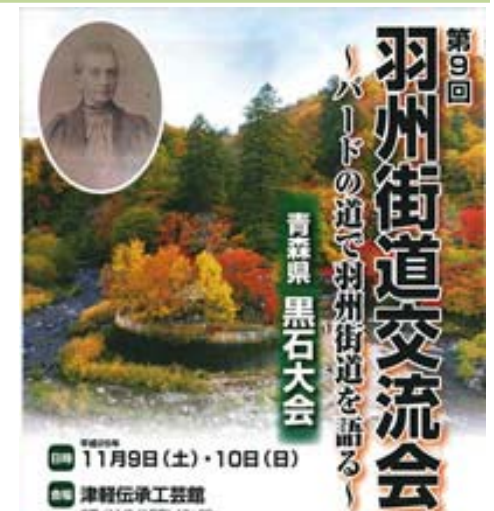
平成25年11月9日(土)～10日(日)

第9回 羽州街道交流会
青森県 黒石大会 『バードの道で羽州街道を語る』

基調講演や朗読会を通じてイザベラ・バードの足跡に迫ります。イザベラ・バードが訪れ称賛したとされる“中野もみじ山”や今も伝統的建造物群として当時の姿が残る“こみせ通り”。これらをテーマに開催されます。

メイン会場: 津軽伝承工芸館

- 【1日目】 基調講演「イザベラ・バードが辿る明治の日本～通訳 伊藤の素顔～」
朗読会「日本奥地紀行」
分科会「①バードの道と地域づくり」「②古い町並みの魅力」
- 【2日目】 探訪会「バードの足跡探訪会(バードが歩いた道と町並みを辿る)」



お申し込み先: 黒石大会運営委員会事務局 まで

TEL 0172-52-2111

FAX 0172-52-6191

事務局からのお知らせ

【H25.10.20 現在の会員数】 76名/団体会員7団体を含む(前号報告より1名増)
正会員 45名 団体会員7団体 賛助会員7名 WEB会員17名

会費納入に関して

- 会費納入いただきました会員の皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。
- なお、当年度の会費は引き続き随時受け付けておりますので、納入がお済みでない方は、下記口座までお振込いただくか、みやぎ街道交流会事務局までお持ちください。

【会費のお振込み先】 みやぎ街道交流会 会計 馬場恭子
仙台銀行(コード:0512) 上杉支店(コード:225) 普通口座 2523091

会員登録内容に関して

- 会員登録内容に変更がある方は「会員種別異動届書」を事務局までご提出ください。
 - 会員種別異動届書が必要な方は、事務局までお気軽にお問い合わせください。
- ※当交流会担当者が不在の際は「会員登録内容の変更」の旨とお名前・連絡先をお伝え下さい。こちらから折り返しご連絡を差し上げます。

【お問合せ先】 電話・FAX・Eメールでご連絡をお待ちしております。
TEL 022-722-3380 FAX 022-722-3381 mail miyagi.kaidou@gmail.com

交流会ニュースでは、会員の皆様からの投稿をお待ちしております。街道探訪記や研究成果、季節の写真やスケッチなど、内容は問いません。ぜひ、交流会ニュース編集部までお知らせください。

編集後記

みやぎ街道交流会ニュース第25号を最後までお読みいただきありがとうございます。第25号は今年度で開催したイベントの報告を中心にお届けしました。今後も秋の深まりとともに注目の街道イベントが目白押しです。皆様お誘い合わせの上ふるって出かけください。次号は新年号の予定です。お楽しみに。(くり)